

英米文化学会 第 171 回例会のお知らせ

(例会担当：河内裕二)

日時：2023 年 11 月 11 日 (土) 午後 3 時 00 分～4 時 30 分

(午後 2 時 30 分受付開始)

場所：日本大学文理学部 オーバルホール (図書館 3 階) &Zoom*

(東京都世田谷区桜上水 3-25-40)

図書館の場所

<https://chs.nihon-u.ac.jp/about/campus/>

【京王線・東急世田谷線】 下高井戸駅 下車 徒歩 8 分

【京王線】 桜上水駅 下車 徒歩 8～10 分

【小田急線】 経堂駅 下車 徒歩 20～25 分

*日本大学文理学部オーバルホールを会場にし、同時にオンライン(Zoom)によるハイフレックス開催の予定。

非会員で Zoom 参加を希望される方は、お名前とご所属を明記し参加希望のメールを事務局 MichioTajima(at)SES-online.jp (注：@を(at)に書き換えてあります)までお送りください。ミーティング ID とパスコードをお伝えします。

開会挨拶

英米文化学会会長 君塚淳一 (茨城大学) (3:00-)

研究発表

ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』における「魂の傷」

(3:10-4:00)

発表 中村一輝 (東洋大学)

司会 河内裕二 (尚美学園大学)

閉会挨拶

英米文化学会副会長 田嶋倫雄 (日本大学) (4:00-)

事務局からの連絡

発表抄録

ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』における「魂の傷」

中村一輝（東洋大学）

19世紀に活躍したナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) の『緋文字』 (*The Scarlet Letter: A Romance*, 1850) には、後に F. スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald, 1896-1940) がエッセイ『崩壊』 (*The Crack-Up*, 1931) や長編小説『夜はやさし』 (*Tender Is the Night*, 1934) で、人間のもろさを描く文脈において使用する「ひび」 (“crack”) という言葉の原型が既に描かれている。

『緋文字』では作品中で「人間のもろさと悲しみの物語」 (“a tale of human frailty and sorrow”) という言葉が語られる。その言葉は作品それ自体を的確に物語っているが、言い換えれば、ディムズデル牧師とチリングワース医師との対話にある「魂の傷」 / 「魂の悩み」 (“the wound or trouble in your soul”) であると言ってもよいだろう。

本発表では、フィッツジェラルドをコンテクスト (切り口) として、ホーソーンの『緋文字』を考察し、「魂の傷」 (「人間のもろさ」) の物語の根底には、結婚 / 宗教 / 職業の問題があったことを明らかにする。